

## 巻頭言（2013年7月号）

理事長 新谷友良

### 「聞こえ方と話し方」

昨年10月号の協会ニュースで騒音と聞こえについて触れましたが、騒音を少なくすることで聞こえは格段によくなります。その実例は磁気ループで、話し声がほとんど直接ループを経由して耳に伝わるため、騒音を取り除かれ非常に明瞭な聞こえになります。それに加えて、よく言われることですが、話し方による聞こえの改善効果を今実感しています。

話し方による聞こえの改善については、補聴器効果のある方にとっては当たり前のことなのかもしれませんが、私の場合補聴器効果がなく、今年3月人工内耳を装用し、今聞こえの回復をトレーニングしている中で、このことをまざまざと実感しています。

ほとんど同じような声の大きさと、同じような早さなのに聞こえが随分違うことがあります。よく言われる滑舌が大きな問題のように思えますが、話し方の早さ・遅さ、強弱、文章の切り方など様々な要因が絡まっているような印象を受けます。勉強不足なので、既にこのような話し方をすれば聞こえやすくなる、このように訓練すれば聞こえやすい話し方を身につけることができる、といったプログラムがあるのかも知れません。ただ、このようなプログラムが私たちや、私たちを取り巻く人たちに普及している様子や、そのための勉強会や実践の例はあまり聞きません。

昨年埼玉で開かれた全難聴の福祉大会で「会話支援器」の分科会がありました。iPhone、iPadによる会話音を文字変換する仕組みなのですが、話し方によって文字変換の正解の確率が随分違います。一般的にある人が仕組みを利用することを繰り返すと、学習効果が出てきて、変換の正解率が非常に向上します。しかし、NHKのアナウンサーの声などは初めてであっても、普通の人に比べて格段に良い正解率を示したそうです。

話し方は人それぞれで違っており、それがコミュニケーションを非常に豊かにしているのですが、聞き取りやすい話し方には一定の基準があり、その基準を明確にし、それを誰もが承知している、必要な時にはそのような話し方ができることは大切なことのように思えます。私たちは、「筆談」が社会の当たり前の習慣として普及すること、「筆談を文化に」ということを求めています。それに加えて、「聞き取りやすい話し方の普及」も大きなテーマとなるような感想を持っています。